

# 訳読から音読中心への授業を目指して

(個別音源を利用したシャドーイング授業の実践)



## はじめに

一昨年県立教育研修所において英語教員対象の研修講座を受講し、アクション・リサーチという手法を用いて自分の授業を改善する研究を試みた。そして昨年引き続いてその研究をするために、ICTを活用して授業の活性化を図ることを目指した「兵庫・英語授業研究サークル」(文部科学省H16年度教育情報共有化促進モデル事業)に参加した。今回はその研究を通して自分の授業がどのように変化したかを紹介したい。なお、以下のHPに指導案や、ハンドアウト、授業のビデオクリップ等、今回の研究に関する全ての内容が報告されているので参照していただきたい。

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~h16Eng/admin/EngNew/index.html>

県立相生高等学校教諭

おがきはら よしひろ  
小笠原 良浩

## 研究課題と授業実践

1時間の授業の中で生徒は実際どれほど英語を使っているだろうか。教師の日本語による説明を聞いている時間の方が多いいのではないか。今回の研究では、英語Ⅱにおいて、和訳に頼らない授業の構築を、また生徒の言語活動を保障しながら、英語学力と実践的コミュニケーション能力を高められる授業を目指した。

まず、授業中に日本語訳を配布することによって内容説明の時間を省き、音読に時間をかけるようにした。音読を通して学習事項の定着がすすめば、リプロダクション(テキストやハンドアウト等を見ずに、その内容をアウトプットする)のレベルまで到達できると考えた。また、個別音源を使用することにより、個々の生徒のレベルにあわせた音読練習ができるのではないかと考えた。

## 1学期の授業

授業の最初は前時の復習として Last Sentence Dictation を行った。教師が前

時の授業範囲を音読し、任意の部分でストップする。生徒は教師が最後に述べた英文をディクテーションする。生徒の集中力が増す活動である。

次に、予習の確認としてハンドアウトを配布した。上半分がチャンクごとにスラッシュを入れたテキストの本文で、これは後の音読練習時に使用する。下半分は本文の和訳で、空所が数カ所設けてある。生徒は全ての空所に該当な日本語を入れると、教師のところに解答を取り来て、各自の席で答合わせをする。ワークブックとこのハンドアウトを併用することによって和訳にかける時間を省いた。

授業の中心は音読活動（約30分）である。一般的なリピーティングから始まり、その後ペアプラクティスに移る。交互読み練習や、できるだけ速く音読する速音読練習、Read & Look Up など、様々な音読活動を取り入れた。また一斉シャドーイングも試みた。

授業の最後は、数名の生徒に読ませたり、列ごとに速読み競争をさせたりした。

### 2学期前半の授業

1学期の音読練習をさらにバージョンアップしようと、Read & Look Upの部分に、パワーポイントを導入した。イメージとしては、フラッシュカードのセンテンス版と言ったところである。

結果から言うと、このパターンの授業は残念ながら1回のみであった。まず、

普通教室ではパソコン・プロジェクター・スクリーンのセッティングに時間がかかりすぎる。授業前の休み時間10分でも足りないくらいである。また、後ろの方の生徒にとっては見にくいようであった。

授業の最初におこなっていた Last Sentence Dictation は時間節約のため省略した。リーディングに関しては、1学期に使用したスラッシュリーディング用ハンドアウトのフォーマットを変更した。エクセルを使用し、日本語・英語の2列とした。日・英ともにチャンクで改行し、生徒の意識をそちらに向けさせた。Read & Look Up も1学期に比べてやりやすくなったはずである。いわゆる「訳先渡し」スタイルの授業をされている先生方がよく使われているフォーマットである。

### 2学期後半の授業



▲ 個別音源でシャドーイング練習

音読活動の部分に個別音源（シリコンオーディオ）を利用したシャドーイング

授業を実践した。個別音源を使用するメリットはイヤフォンから聞こえてくる英語に集中できることにある。また、読み上げられる英語は2種類のスピードを用意してあるので、個々の生徒のレベルにあわせた学習が可能である。

授業の流れは1学期と変わっていないが、シャドーイングに時間を要するため、日本語の穴埋め問題を省いた。およそその授業構成は以下の通りである。

- 1 ワークブックによる内容確認
- 2 本文の黙読と音読チェック
- 3 コーラスリーディング
- 4 個別音源を使用してシャドーイング
- 5 生徒同士でシャドーイング
- 6 日本語を見て英語でリピート
- 7 ディクテーション



▲ 上記の4と5がペア活動

6の活動は、生徒がハンドアウトの日本語を見ながら、教師の英語をリピートしていく。生徒に負荷を与えて、記憶の定着を図っている。

授業の最後に行っていた数名の生徒

による音読活動を、ディクテーションに置き換えた。「書く」という作業によって、英文をより記憶に残りやすくするためである。チャイムが鳴って時間切れとなるが多かったが、残りはハンドアウトの日本語を見て英語に直すという宿題にした。

授業中に使用したハンドアウトであるが、以前は左側が英語・右側が日本語であったが、逆に左側が日本語・右側が英語に変更した。生徒に日本語を見て英語に直すという意識付けをさせるのがねらいである。また、ハンドアウトの右端にチェック欄を設けた。一人がシャドーイングしているときに、そのパートナーは相手がきちんとシャドーイングできているかどうか、チェックをする。お互いにチェックすることで、ペアで学習する際、両方の生徒に責任を持たせた。

授業後のアンケート結果によると、「リスニング力がついた」と思う生徒が全体の66%で、「英文を覚えられるようになった」と答えた生徒が77%であった。

個別音源の使用について、またこの授業スタイルについて、生徒の感想は以下のようなものが多かった。

<良い点>

- ・個人でリスニングできるのがよい。
- ・スムーズに英文が聞けるようになる。
- ・英文がよく覚えられてよい。

- ・常に何かをしているので集中しやすい。
  - ・たくさん話すことができる。
- <良くない点>
- ・文法や内容説明をもう少ししてほしい。
  - ・音に頼って反復するので、前のやり方 (Read & Look Up)の方が頭に残る。
  - ・パートナーの声が小さいと困る。
  - ・ディクテーションの時間が少ない。

文法や内容説明を希望する生徒が数名いたので、3学期からはテキストのレッスンごとに最初の授業はその課の文法事項の説明や、内容のアウトライン、また新出語句の説明をするようにした。

### 3学期の授業

授業スタイルは、基本的に2学期と変わらない。音読活動の時間をやや少なくし、最後のディクテーションをリプロダクションとプレゼンテーションに変更した。

リプロダクションはヒントが全くないと、かなり難しいので、テキストの内容に関する質問を英語で板書しておく。それらの質問に答えていけば、自然とサマリーになる。テキスト通りの英文でもよいし、オリジナルの英文でもかまわない。時間を見計らって全員で確認する。

最後に何名かの生徒が前に出て、内容についての発表をおこなう。黒板に質問が書いてあるから、それらに答えていくだけであるが、生徒はあまり慣れていないので、これがなかなか難しい。



▲ 個別音源機器とハンドアウト

### おわりに

今回のアクション・リサーチを通して、授業スタイルが訳読から音読中心に変わった。以前の授業はQ and Aなどの言語活動を取り入れてはいたものの、訳読に頼りがちであった。

「訳先渡し」と呼ばれている授業方法を取り入れ、内容確認の時間を省くことによって、音読活動の時間を大幅に増やすことができた。生徒の頭の中に「日本語」ではなく、「英語」を残すという目標に少しは近づけたと思う。

今後の課題は、授業の最後の部分にある。効果的にアウトプットができるようにするには、どうすればいいか。この点に焦点を当ててリサーチを継続したい。

個別音源の使用と、ペアワークを取り入れることによって、生徒はより積極的に授業に参加するようになった。今後このようなスタイルで授業ができるよう個別音源の普及が望まれる。